

津波災害関連の「自然災害伝承碑」代表事例

追悼碑
(北海道天塩町)



昭和15年(1940)8月2日、神威岬北西沖を震源地とする積丹半島沖地震(神威岬沖地震)により、天塩川口は2メートルの津波に襲われ10名の命が奪われた。

日本海中部地震津波慰霊之碑
(秋田県男鹿市)



昭和58年(1983)5月26日正午、日本海中部地震が発生し、各地に多大の被害をもたらした。この地震の約20分後予期していなかった大津波が来襲し五里合地区において6名の尊い命が失われた。石碑の側面には、この地区に押し寄せた大津波の高さ(海拔6.89m)が刻まれている。

延宝の津波供養塔
(千葉県一宮町)



延宝5年(1677)10月に発生した延宝房総沖地震により津波が発生、現在の宮城県から静岡県伊豆東海岸までを襲った。
この津波により東浪見地区では流された家屋は数知れず、143名の命が奪われた。

みちびきの像
(新潟県新潟市)



昭和39年(1964)の新潟地震では26名が亡くなり、津波と液状化で広く浸水し港では火災が発生した。この像は地震当時をしのびそのさなかに具現された師弟間の愛情の交流の美しさを後の世まで伝えようとするものである。

大地震両川口津浪記
(大阪府大阪市)



1854年12月24日の安政南海地震後に発生した津波によって、安治川・木津川等に停泊する船に避難した人々が大きな被害を受けた。

1707年に発生した宝永地震の時に起きた同様の災害の教訓が生かせなかったことを、後世への戒めとして残すため建立されている。

松崎の碑
(島根県益田市)



万寿3年(1026)、地震による大津波で高津沖にあった鴨島が水没するなど大きな被害を被った。

鵜和光神社石碑
(徳島県阿南市)



鵜(くぐい)地区では、およそ100年ごとに大津波に襲われている。碑には1361年から1960年まで7回の大地震の記録が記され、平時の戒めとするよう説いている。また、1946年昭和南海地震と1960年チリ地震による津波の潮位も刻まれている。

外所地震供養碑
(宮崎県宮崎市)



寛文2年9月20日(1662年10月31日)午前0時、日向灘を震源とした外所(とんどこ)地震が発生し、死者200名、家屋全壊3800戸の甚大な被害が出た。当地ではこの地震による地盤沈降と津波により家屋246戸が海に没し、水死者15人の被害に見舞われた。ほぼ50年ごとに新たな碑が建立されている。